

ほほえみ 第67号



4月から、常勤医が一人体制となり、二か月が経過しました。金曜日には、秋田大学・臨床腫瘍学講座から診療応援をいただき、外来の体制は、何とか現状を継続しておりますが、マンパワーが足りない点は否めません。更に、6月からは、石巻赤十字病院からも、診療応援をいただくこととなっています。こういった厳しい状況から、病院幹部の先生方からのご助言もあり、化学療法を行っていない経過観察の方に関しては、紹介元の診療科で経過を見させていただく方針となりました。いろいろとご迷惑をお掛けしておりますが、宜しくお願い申し上げます。

米国癌学会 2016

6月は、毎年、米国癌学会が開催される月です。2015年に引き続き、6月は米国癌学会の話題とします。今年は6月3日から7日まで、シカゴで開催されます。開催前の情報ではありますが、少し紹介したいと思います。

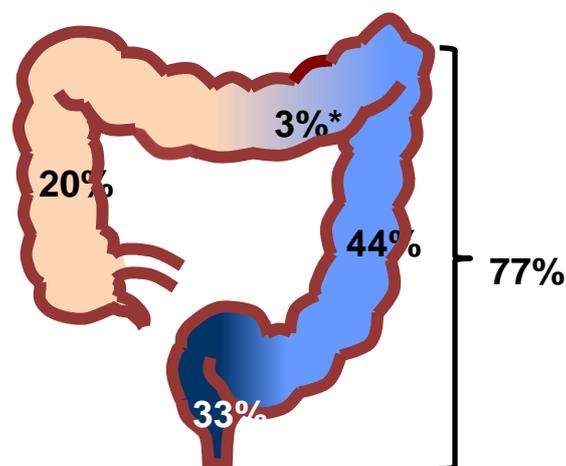
消化器がんの領域では、大腸癌の化学療法の分析で、左側結腸癌、右側結腸癌で、抗EGFR抗体薬の感受性が異なるというデータが報告されるようです。前回の米国癌学会でも取り上げられていた話題でしたが、その後の解析を加えて報告されます。

通常、以下の図のように青の部分、左側結腸(体の左側)の方が、大腸癌全体の中で占める割合が高いことが知られていました。大腸癌の発生の仕方、性格も異なるのではないかと、昔から興味を持たれていましたが、今回、特定の薬剤の効き方に違いがあるのではないかとということが報告されます。

具体的には、左側結腸癌では抗EGFR抗体薬であるセツキシマブの感受性が高い、すなわちセツキシマブが効きやすいが、右側結腸癌では、感受性が高くないという結果です。古くから、大腸癌の発生の仕方に関しては、いろいろと研究が成されてきたのですが、従来から、遺伝子のエラーを修復する反応に違いがあるというデータであり、今回のデータも含めて考えると、発生する場所によって、遺伝子レベルで癌の性格が異なるということ、暗黙の裡に示しているのでしょう。

このように、同じ大腸癌であるという認識から、違いを見出すことによって、概念は細分化され、知識は深くなるのです。将来的には、教科書が大腸癌という大分類の下に、遺伝子機能などによって細かく細分化されて記載されるということになるのかもしれませんが。

この研究の反響がどの程度、今回の学会であるかですが、ガイドラインも書き換えられるということになると、治療の組み立ても変わっていくかもしれません。注目しています。



大腸の部位と、大腸癌の中で各部位が占める割合

水曜日の外来の診療応援について

2016年6月から、月二回で水曜日に、石巻赤十字病院の腫瘍内科の大堀久詔先生に、外来の診療応援に来ていただくこととなりました。大堀先生は、当科が設立された2006-8年にかけて、スタッフとして助けていただいておりますが、当科のマンパワー不足を見るに見かねて手伝っていただくこととなりました。

大堀先生自体は、石巻で診療科長として重職を担われているので、大変、申し訳ないのですが、背に腹は代えられぬ事情もあり、来ていただくこととなりました。日によって担当医が変わる状況で、誠に申し訳ありませんが、宜しくお願い申し上げます。

診察室2番の伝統で、ジャニーズ系のイケメンの先生です。



バラ ラプソディ・イン・ブルー

今年植えた、バラのラプソディ・イン・ブルーが開花しました。このバラはいわゆる青バラのカテゴリーに入るものです。咲き始めは赤紫色ですが、徐々にグレーがかかった紫に変化します。陽射しにも弱く、デリケートなバラですが、素晴らしい匂いで次々と咲いています。このバラの匂いは、スパイシー香と表現されるものです。言葉でスパイシーというと、きつい匂いが想像されますが、基本は甘い香りで、爽やかな、気分が高揚するような匂いです。

素晴らしい香りのバラとしては、パパ・メイアンというバラで、どこまでも甘い香りがありますが、これはバラ用語でいうとダマスク香という、香水の薔薇の香りですね。個人的には、この匂いは純粋な砂糖の甘さのような、甘い香り以外の要素の少ない香りに感じます。バラは必ず良い香りがするものではないのですが、香りこそ、実際にバラを育てる醍醐味であるように思います。



MEMO

6月のがん化学療法科の予定

6月1日	診療応援(大堀先生)
6月3日	診療応援(島津先生)
6月10日	柴田教授外来
6月15日	診療応援(大堀先生)
6月17日	診療応援(福田先生)
6月17日	新渡戸稲造記念メディカル・カフェ(予定)
6月19日	父の日
6月24日	診療応援(井上先生)

